



“ ウーパールーパーの手 ”

理事長 高杉 洋史



寒い日が続きますが、幼稚園にはこの寒さが好きな生物がいます。植物ではチューリップやパンジー、ビオラなどです。チューリップは冬の寒さを経験しないと花芽ができず、春になっても葉っぱだけが大きくなるのだそうです。今回の話題はウーパールーパーです。玄海ゆりの樹幼稚園に貰われてきて6・7年にはなります。最初は小さくて可愛かったのですが、今はいかにも両生類だという動きをしてくれます。要するにじつとしている時間が長いというか、プカーと水面近くに浮かんで寝ているとかです。ところが夜になり人が見ていないところでは結構激しいことをしてくれます。60センチ水槽を真ん中で仕切って、右に黒いの、左に白いのが入っているのですが、時には2匹が一緒になったり、時には入れ替わっていることもあります。仕切りを押し倒して移動するのです。ハプニングは2021年の8月に起こりました。クロちゃんがシロちゃんの右手と左足を食べちゃったのです。それでもシロちゃんはいつものようにのんびり暮らしていたのですがなんと12月に指が生えてきました。今の所全く以前の通りの大きさとはいかないものの、見栄えは良くなってきました。次第に元の大きさに育っているようにも見えます。両生類はすごい。もちろん植物だってすごいです。

11月までペチュニアやカーネーションが咲き続けてくれたので、だめもとで株元に挿し芽をしてみました。これがうまく発根して育っているのです。植物の方は手の指どころか植物体全体のクローンができるのだから大したものですよ。長年生きていると耳学問でトカゲの尻尾きりの話や挿し木やさしめの話は知識としては知っていましたが、実際に経験すると一段と面白いです。今年も子どもたちと、「へええ」とか「はああ」とかいふ経験をしたいこうと思います。

手始めにチューリップの水栽培とシイタケの菌床による栽培をします。年末にはあい組のシイタケが直径20センチ近くまで成長しました。今から春にかけてどんどん大きくなることに期待しています。



「ミュージカルの曲を聴きながら・・・新しい令和4年に期待して思うこと」 －幸せはいつも自分のそばにある－

学校法人高杉学園 吉塚ゆりの樹幼稚園
園長 高杉美稚子

新年あけましておめでとうございます。昨年も大変多くのご協力とご理解を賜りました。ありがとうございます。今年も園児たちと共に頑張ります。どうぞご支援宜しくお願い致します。

コロナ禍と付き合って2年、今年はどうなるか、先は見えませんが、12月から年長組のミュージカルの歌声や小さい組さんも素敵なお踊りの音楽が聞こえ始め、気持ちは弾み前向きに明るくなります。



年末から、園児たちの郵便ごっこのお返しの手紙に折り紙を始めました。65歳、手先を動かすことは脳トレにもなり、物忘れが進んだと感じる私にはとても良い刺激でした。今月の挿絵はそんな私のつたない折り紙の写真でお届けします。最初は簡単な、お手紙の折り方から始めました。次は着物型にチャレンジ。小さい頃、コメ粒ほどの鶴を折ったことを思い出し、今度は鶴のポチ袋、ポストカード立て、ネームカード鶴、お菓子包み、お菓子入と折っていきました。



そこまでは良かったのですが、では復習とお正月に折り始めてみると、お手紙折りや、簡単なポチ袋迄は覚えているのですが、少し折り方が難しいポチ袋や鶴の置物になってくると、それぞれの鶴の折り方が皆、微妙に似ていてそして、微妙に違って、最初からはっきり折り方が違うのは思い出せるのですが、最初はよく似ていて、途中から違っているのはどれがどれの折り方か思い出せず途中で混乱してしまい、そんな自分が情けなく、愕然となってしまいました。



それでも、手先だけは覚えているのもあり、どんどん折り進んでいくうちに、目標とは違うものが出来上がってきた時は、本当に愕然を乗り越して「私は大丈夫か？」とお正月そうそう心配になりました。



歳を重ねることはそういうことかと、自分の年齢は認識しているものの、いつも書いているように、気分は35歳、まだまだ、成長の途中と認識している私。いくつになっても「臆病で、怖がりの私」は、大人になって「ただの態度のかい、臆病者になった」だけで、我が物覚えの悪さに、この先、私は大丈夫かと臆病風が吹き、心配になり、暗澹としたお正月の午後でした。

このままでは、本当にぼけてしまうと、お正月三が日、掃除、洗濯、夕飯の片付けが終わって、お風呂に入って寝る前に、全種類、何回か復習すると何とか覚えていて「まだ、ぼけてないじゃん」と安堵したり、自分をなぐさめたり、そしてまた明日折ると急に間違ったりするのかもしれませんが。何事もスモールステップが大事。忘れても、忘れても、毎日少しずつ復習してみようと思って、バックに折り紙を忍ばせているところです。失敗したり、やり直したり、喜んだり、落ち込んだり、再チャレンジしたり。折り方も様々あり、工夫をすると、こんなことも出来るんだなあと感じ、折り紙一つにも、なんだか、人生の縮図が見えてくるようです。

さて、仕事始めにミュージカルの演目や衣装について考えていると折り紙もさることながら、本当に子どもの頃に読んだ物語、よくミュージカルで使う演目の物語をはじめとして、様々な心に残る素話、絵本、物語には深いものがあると感じます。

私が執筆した「スーちゃんがんばりやさん」の絵本に出てくる四つのお話「ウサギとカメ」「北風と太陽」「アリとキリギリス」「サンタクロース」の中だけでも、いろいろな見方、諸説があります。



まずは、私の絵本のあとがきでは物語の部分について、このように書いています。



**小さなうーちゃんのシャボン玉ファンタジー、こころの旅が始まり
多くの出会いの中で、自分の感情に気づき、
勝ち負けではなく、プロセスを楽しむことを→「ウサギとカメ」の絵
黒か白かではなく、中庸を大切にすることを→「北風と太陽」の絵
頑張るときは頑張り、休む時は休む、体の声を聴くことを→「アリとキリギリス」の絵
人を大切にするには、自分の心の声を大切にすることを→「サンタクロース」の絵
このような意味を含めたあとがきでは伝えています。**

「ウサギとカメ」途中でさぼったうさぎより最後まで頑張ったカメは偉かったねというお話です。
私が伝えるまでもなく、多くの方が、絵本のすばらしさ、物語の中に込められた様々な意味、
そして読む人によって感じるその人なりの解釈の違いを本にされておられます。

私の大好きな心理学者の河合速雄さんは「ウサギとカメ」のお話では
こうっておられます。カメもウサギも、本当は劣等感の塊だった、
ウサギが本当に自信があったなら、カメではなく他のウサギに挑戦をしろ、
自信がないから、必ず勝てるに違いないと踏んだカメに、挑戦をしたのだ。
また、もしカメが本当に自信があったなら、ウサギの挑戦を、「私とあなたでは
住む世界が違います」と相手にしなくて断ったであろう。そして、自信がないから、
ここで、断ったら馬鹿にされるだろうと、挑発に乗ってしまったカメ、彼に断る力があれば、
この戦いはしないで済んだかもしれない。



**私はここで、「勇気をもって断る力の大切さ」と「私はその戦いは出来ませんと言える
潔さ、その戦いの意味が分かりません。真意を教えてといえる正直さ」を学び、
ゆりの樹幼稚園の教育理念の中でも伝えています。
また、よく、「ウサギとカメ」のお話は園児にしますが、「スーちゃんがんばりやさん」
を執筆した後では、最後まであきらめないで、頑張ったカメも偉い、
そして疲れたら、ちゃんと休むことを知っていた。そして、もう一番になれないと
分かった時点でも、ゴール迄行って2位になったウサギさんも両方偉いねとお話します。**



経営学的な観点から、このストーリーの本当の意味を深掘りしたら
どうなのでしょう？

ちょっと思いついて調べてみたら、こんな記事を見つけました！

「ウサギとカメ」の本当の教訓とはの記事を簡単に要約すると、
ウサギはカメを見ていたから休んで負けた。逆にカメは、ゴール
しか見てなかったから勝った。つまり、ライバルや競争相手を見て
方針を決めていると、相手に振り回される事になる。究極的な
ゴールをしっかりと見極め、そこに向かって行く事が大切！って事。
比較するのを止めろ！って感じでしょうか？とありました。
いろいろな見方、がありますね。



「北風と太陽」は、北風と太陽の旅人の上着を脱がせることができるかどうかという勝負、力比べのお話
です。北風が力いっぱい吹いて旅人の上着を吹き飛ばそうとするより、太陽がたくさん照って熱くなった
旅人が自ら、上着を脱いだというお話です。

冷たさより、温かさを説いていますが、**私は二組が仲良く笑顔で寄り添っている絵にして、厳しさと愛と
思いやりは両輪であることを、表しました。**

物事がうまくいかないのなら、別の方法を考えてみよう！という意味合いでもあります。一面的ではなく、
多面的に対処するのが良いということですね。根気強く、時間をかけて、温かく、思いやりを持って進める
ことの方が、最終的には大きな成果があります。厳しさばかりだと反発しますが、そこに、愛と思いやりを持った
厳しさであれば、相手も受け入れやすいということでしょう。いずれにしても、時と場合により、厳格な態度で
臨む姿勢と、寛大な態度で臨む姿勢、その両方が人が育つには必要ですね。

**馬を水飲み場に連れて行っても、飲むとは限らない、馬が自ら水を飲む(自ら上着を脱ぐ)環境を整えて
あげることが大事ということが一番伝えたかった事**

「すべきことは息だけ」

食べ物や水さえ「自分が食べたい」の気持ちがあればおいしくはないのです。

「～すべき」から「～したいへ」ゆりの樹幼稚園のエンパワーメントですね。

「アリとキリギリス」の物語は、アリたちは食べ物が無くなる冬に備えて一生懸命に食料を運び蓄え、キリギリスは夏の間は食べ物なんかたくさんあるのに一生懸命に働くななんて馬鹿馬鹿しいと思っているのです

厳しい冬がやってきて、アリたちは夏の間にしっかりと働いて食べ物を蓄えていたので準備は万全、キリギリスは飢えに苦しみます。サボったことの代償は大きいですね。



私はあえて、さぼったキリギリスは登場させませんでした、
この物語の教訓、計画的に人生を過ごすことが大切であるというメッセージと同じくらい、もしアリのように、万が一に備えていても、辛い、苦しい、悲しい事が起こることもある。そうなったとしても、「そんなことも あるのが人生、思い通りいかないからこそ人生は面白い、何とかなる、そして、失敗も、惨めさも、悔しさも、辛さも、苦しさも、悲しさも、情けなさも、怖さも、受入れ前を向いていこう」、ということを 伝えたくて、その意味も含んで私は書いています。

別の人は、下記のようなことを書いていました。サボっていたキリギリスに食べ物を与えることは気持ちのいいものではありませんが、そうは言っても、食べ物なしでは生きていけません。アリはキリギリスを改心させます。心を入れ替えるならと、食べ物を与えるのです。「慈悲の心」を持ち、「哀れみの心」を忘れず、人に対して優しくありたいという教訓があります。

また、一度はチャンスを与えることの大切さも示唆しています。間違いは誰にでもあることです。間違いに気づき自ら改め、心を入れ替えるきっかけになったのなら、人を許すという選択もあるわけです。これは自分が試されているような感じですね。そんな考え方もできるなあと感じて読ませていただきました。



サンタクロースのお話は、**人に優しくするためには、自分の心に余白、ゆとりをもって生きてほしい、そのためには、しっかり寝ること、食べる事、そんな規則正しい生活習慣と生活リズムが心のゆとりを生むことが大切である事を伝えたいつもりです。**
また、自分が疲れていることに気づくと同様、友達や家族が疲れていないかに気づいてあげる事、サンタクロースにとってはトナカイ君も、自分と共に休ませる気配りが出来るか、というところを、絵に表しました。



自分の気持ちに気づくから、家族の気持ちが分かり、友達の気持ちも分かるようになる。自分が辛いということが分かれば、人が辛いということがどのような事か分かるようになり、自分が我慢を自らするという選択もできる。

相手の辛い気持ちが分かるから、自分の気持ちも伝えることが出来る。そして、「分からない、教えて、助けて」が言える。自分の気持ちが分かるから、相手の辛さも受け入れることが出来、世界中で一番素敵な言葉、心のこもった「ありがとう」が言える。心が美しくなるから、ありがとうという言葉が更に美しく響く。そして、家族の心がわかるということは、我が子の事が分かり、親も自分の気持ちを大切にできるそんな好循環が起きる、シャボン玉ファンタジーを終えたすーちゃんは

「大丈夫、きょううまくいく。失敗したら、それも私。今、ここで、できることから始めればいい」と受け止め「私は私らしく生きていくのです」というゆりの樹幼稚園の教育理念が生まれる元となった「すーちゃんはがんばり屋さん」の物語です。

表現発表会でもとりあげられる物語、今年は吉塚、玄海、地島合わせて7作、シンデレラ、美女と野獣、塔の上のラプンツェル、アラジン、リトルマーメイド、サウンドオブミュージック、りすのきょうだいと不思議なタネ、からも、様々な見方、教訓が得られることでしょう。



どんな状況にあっても、幸せはいつも自分の中、自分のそばにある。すべてのミュージカルに通じることは、ゆりの樹幼稚園の教育理念の「どんな状況にあっても、そこに小さな幸せを見つけるエネルギーを持ち続ける事、置かれた場所で咲くこと、そのためには笑顔で、いつも、いいところに焦点を当て、謙虚に「ごめんなさい」が言え、正直に「わからない、教えて、助けて」を伝え、心からのありがとうの気持ちを持ち続ける事が大切」です。

園児達が、最終年度、最後の大きな、行事となる年長組の表現発表会、ミュージカル、園児たちがそこから、何を見つけ、音楽や歌に触れ、何を感じて育ってくれるか、それぞれですが、とても楽しみです。

目で見ても、耳で聴いても、体で感じて、自分で決める、のゆりの樹幼稚園の愛言葉通り、目にすっきり、耳にはっきり、心にくっきり、体にしっかり行動変化してくれることでしょう。

さて、本題です。5つの過ぎたる関わりについて、語ってきました。
これを打破する方法は「セルフコントロールできる子どもに育てること」にあると私は考えます。
子どもが自分で決めるということはとても大切なことで、いつ自分で決めるのかも含めて
子どもに任せて待っていてあげるところに子どもの自主性が育ちます。

自分の事が大好きで最後まで自分が 信じられる教育

ゆりの樹幼稚園が考える教育の循環

「真に自立した子ども」に育ちます
自分を信じ、自分らしく生きていくことができます



ゆりの樹幼稚園の教育では「自己選択→決断→承認→自信→自己分離→個別性→共感→自立」の教育の循環を通して、真に自立し、自分の事が大好きな子ども達を育てていきます。この教育は日々の保育だけでなく、子ども達が自ら選択、決定し、自己承認が出来る「ゆりの樹幼稚園の自己決断の教育」です。

自己決定力を身につける、即ち自分で自分を律する（セルフコントロールできる）ことが出来れば、人は切れません。自分で決めるためには、大切なことを自分の今の感情に気づいて、自分で決めるという体験をすることが必要です。
いつするかも含めて、自分で決めていいとなると、自分の衝動や欲求を抑制したり、先延ばしにしたり自分で出来るようになって行きます。

この「セルフコントロールできる子どもに育てること」の課題は、友達との関りの中で育つことが最も大切
です。**エリクソンは子どもが人格形成をする過程で最も大切なことは、「友達から学ぶこと」であると言っ
ています。**

「親や教師やその他の大人たちから教えられた事を、
そのままの形ではなく、仲間と共有しあい、咀嚼しあって
始めて人間的な能力にすることが出来る」また、「子どもの
自立とは自分一人で何でも出来ることではなく、友達に
寄りかかったり、友達を支えることで、程よいバランスを
保てる事にある」と佐々木正美先生は著書に書いておられます。



信頼するとは「信じて頼ること」。友達を信じることが出来るから頼ることが
来るのです。信じているからけんかも出来るのです。教えることが出来て、教えて
もらうことが出来る関係です。人に依存し、依存されるのが、自立の一步です。
人を信じる力がしっかりしていれば、人を頼ることができるし、人に頼られることが
できます。そして自立の第一歩を踏み出すのです。友達が信じられるかどうかは
親や教師が信じられるかどうかにあります。だから親や教師のかかわりが根底で
大切なのですね。これは親や教師代わりの人でもいいと思うのです。



心理学者、エリクソンの言う「友達から学ばなければならない」とはこのことです。まさに、ゆりの樹
幼稚園の自立の考え方、教育の循環の根幹もこのエリクソンの発達レベルに相応しているということに
なります。子どもの発達に大きな関心を抱いた心理学者エリクソンは人間の子どもの学習し、克服しなければ
ならない発達課題は、母親や教師を通して周囲の人々や世界に対する絶対的な信頼感であると指摘して
次のように言っています。

「この時期に母親や教師を絶対的に信頼することを体験し得なかった子どもは、その後ずっと、自分の
生きる世界やそこにいる人々に対して、基本的な信頼の感情を育み得ないまま成長していくのではないか。
親や教師にこのような育て方をされた子どもは、劣等感を持ち、目的もしっかりもてない。ただ八方美人で
周囲に迎合してしまう、ただ周囲の人に気に入られたいと思ってしまう。

周囲の人から不愉快な顔をされるとおびえて、どんな嫌なことでも体に鞭を打ってしまう。彼らは周囲の
人から責められて生きてきた。だから、責められていなくても、責められていると感じてしまうようになる。
このような人の努力は自分の本性を否定する努力だから、努力すればするほど、消耗し、生きるエネルギー
を失う。こういう人には愛がない。何をするにも見返いを求めている。

そして、マイナスの発想をする。人がマイナスの発想をするのは「私はこんなに辛い。それでも頑張っている。そんなあなたはえらい。すごいと認めてもらいたいからである。その奥にだから私を愛してという魂の叫びがある。愛情飢餓感がマイナスの発想の原点なのである。決して問題解決を求めて入るのではない、ただ認めて、愛してといっているだけなのである。その気持ちを分かってあげれば、「そうがんばったね」と分かってあげればいいのである。

生きることがつらくなった人は周囲への憎しみ、恨み、敵意、恐怖、不安といったあらゆるマイナスの感情を惨めさで訴える。日頃の憎しみの感情をストレートに吐き出せないのが、傷ついたという惨めさを誇張することで根雪のようにたまった憎しみの感情を吐き出そうとしているのである。そのことでマイナスの感情を訴えているのである。



でもそれが小さい頃から、愛されることがなかった無念の気持ちのわかるけれど、生い立ちという視点からすれば、本当に同情すべき人なのである。だから、過干渉、過期待が怖いのである。」というエリクソンの言葉です。



子ども達にとって、大切な体験を、大人が先に先に摘み取ってしまっているということもあるかもしれません。

家庭で、小さな怪我を何も経験してこない子どもは、集団生活に入った途端、転び方、避け方が判らず、大きな怪我をするという事があります。

小さな怪我は大きな怪我を未然に防ぐ為には、必要な経験なのに、その経験がないから、大きな怪我に繋がっているのかもしれない。痛みを知らない子どもは、平気で、お友達を叩きます。だから、子ども達の将来を考えると必要な体験を大人が先に先に摘み取ってしまうことに危惧を感じます。子どもにとって良かれと思ってしている大人の行為が子どもをひ弱で、ダメにしていくのかもしれない。

今の子ども達には、その年齢に不可欠な体験が必要です。そのためにも、幼稚園では体験教育を大切に進めています。ご家庭でも、共に体を動かす事から始めてください。内容は何でもいいと思います。親や子どもで共にすることに意味があるのではないのでしょうか。だからこそ、親や子どもが触れ合える夏休み、冬休みなどの休みが必要なのだと思います。ここに又、幼稚園の存在意義もあると私は考えます。最終的に子どもの心をつかめるのは親や教師の姿からだけなのです



次に、子どもが育つのに、何が大切かというと、自分の人生に対して自信を持つという事です。どんな子どもにも、この世の中に生きている価値があります。親や教師が子どもを愛するという事は他人はどうであれ、親や教師は我が子には「だいすきだよ」等と言い続けて、生きている価値を認める事です。そうすると、子どもは、自分に自信を持って生きていく事が出来ます。自分の生きる存在が認められた時に、初めて人も認められるのです。

近年、私が教育相談で子育てに悩んでいる保護者の方と向き合ったとき、保護者の方自身の育ちに目が向くことが多いのも事実です。

では、「親の5つの過ぎたる関わり」を受けて、もうすでに大人になってしまったお父さんやお母さんはどうしたらいいの？ということです。エリクソンの言うように一生基本的な信頼感を持たないまま一生過ごすのでしょうか。そして永久に苦しみ続けるのでしょうか。



親の養育態度が自己否定で、不満やイライラが多く、子どもへの期待が大きくて、放任か、厳しすぎて、ストレスがたまった親がいたとします。子どもである自分はそれが嫌だったのです。そして、自分が親や教師になった時、この子だけは自分と違った育て方をしなければと思いながらも、親は自分の過去を取り戻そうとして同じ事を繰り返してしまうということがあります。



そういうことは繰り返される事も確かでしょう。
そして、皆が、そうでしょうか。私はそうは思いません。
確かに「五つの過ぎたるかわり」誰しもあるでしょう。
少なくとも、ここまで読んでくださった皆さんは、
そういう事があると言うことを、学んで頂きました。



又、我が子がかわいいからこそ、そうになってしまうのはむしろ当たり前です。だから、そういう事があるのだという事を分かっていれればいいと思うのです。愛のある気づきですね。「五つの過ぎたるかわり」があるということに、愛をもって気づいていれば防ぐことが出来ます。人が気づいているか否かという事には、天と地の差があります。

過去を顧みる事はとても重要なことです。しかし過ぎ去った過去は取り戻せません。むしろ、新たなスタートラインに立つことが大切です。しかも、誰しも完璧な親や教師に育てられたわけではありません。その上、自分の親や教師も、祖父母に影響を受けた上で、子育てであったのかもしれないということは容易に想像がつくことです。そのことに気づけたとき、自分の親の養育態度に対しても、許すことが出来るのです。



自己実現は一生です。今日も明日も、いくつになっても成長することは出来ます。一生、人間は生涯教育です。変えることの出来ない過去をどうするかではなく、今をどう生きるかであろうと思います。「今ここに生きること」を精一杯実現すればそれがやがて、いいえ、その瞬間に過去に未来になります。

だから、私達に子育てという仕事が任されているのだと思います。何度も書きますが親や教師が完璧になっているのを待っていたら、一生子育てなんか出来ません。

人は親や教師になることで、もう一度、自分が通り過ぎなかった発達レベルを繰り返し体験することが出来るのです。人は親や教師になることで人間にもう一度なるのです。いいえ、本当の人間になるのでしょうか。
〔子育ては自分育てである〕ことの所以は、ここにあります。



子育ては自分が成長するまたとないチャンスです。子どもを生み、子どもを愛し、自己肯定観を持つようにサポートするプロセスはまさに、再度、親や教師自身が自分を愛し、自分に自己肯定感を持つためのプロセスです。愛されずに育った人も、自分が子どもを愛し、子どもに愛されることによって自分を愛することが出来るのです。

子ども達は、有難いことに、私達、親や教師を育てるために、私達の所に来てくれているのですね。だから、自分に自信が持てない時、自分を認められない時、いつも不安になるとき、そして自分が好きになれない時、だから、心配しないで。自分の人生の生きなおしをしましょう、もう一度。子育てを通して。だからこそ、人生に遅いことは何もないのです。

子育てにも手遅れということはないのです。気づいた時、今から歩き出しましょう。気づけないより、何より気づいたことが、一番の宝なのですから。勇気を持って・・・一緒に育ちましょう。子ども達と共に・・・

今年も我が子が生まれた日の、あの幸せな時間を思い出しながら……いい年になりますように。